

成島信遍年譜稿（八）

久保田 啓 一

【キーワード】成島信遍・林笠翁・題苑・蓑正高・統泉山景境詩歌集

元文元年 丙辰 一七三六 四十八歳

（承前）

○ 春頃、林笠翁より『儀式徴』を見せられる。

（林笠翁『儀式徴大意』）

松野陽一氏の「林笠翁伝考」（『東北大学教養部紀要』四五号、一九八六年二月）は、林子平の父笠翁の生涯を、江戸武家歌壇や和学者との関わりを中心にたどった論考である。「はじめに」によると、「家系」「略伝」のみが公表され、「著作」の部分は未発表のままとなっており、続稿が待たれる。なお、同氏には「林笠翁家集『野山の風』について」（『文芸研究』一一三集、一九八六年九月）があり、笠翁の著『儀式徴大意』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）を写した由比演徴については、「由比演徴の歌業―江戸堂上派と

下総佐倉藩歌壇」（『東北大学教養部紀要』四一号一、一九八四年二月）も発表されて、幕臣の時代から流浪の期間を経て死去まで、笠翁周辺との交渉もある程度跡付けられる状況に至っている。

この笠翁が幕臣時代に信遍と接点を有した。「林笠翁伝考」によれば、笠翁は『儀式徴』の完成後、荷田在満と信遍に稿を見せたという。先に触れた東北大学附属図書館狩野文庫蔵『儀式徴大意』の跋冒頭には、次のように記される（適宜句読点・濁点を補った）。

右儀式徴、三十四年前、享保癸丑ヨリ始メ、丙辰春終ル。当時兵家松井邦彦有後序。鳴鳳卿二見セシニ、徴ノ題号不穩、刪ト改ヨト云シ故、一タビ刪ト改タレドモ、予ガ心ニ不叶、又復旧名シタリ。（後略）

松井邦彦は出雲藩儒松井蝸庵。「享保癸丑」は十八年。「丙辰」の二十一年（元文元年）まで四年の歳月をかけた考証であった。信遍の意見に結局従わず、「儀式徴」の書名に固執したところに笠翁の自信と執念を見ることが出来る。

享保十八年(1783)が足掛け三十四年前とすると、この跋は明和三年(1766)に記されたことになる。死去の前年である。本文末には「宝曆壬午三月朔旦」と年次が記してあって、宝曆十二年(1762)が本文成立の時期と見なすことができ、享保十八年(1783)は三十年前となるから、この時点から振り返った記述でないことは明らかである。跋の次に「明和元甲申秋模写焉 由比姓岷山藤原演徴」とあるが、「三十四年前」の記載が正しければ、明和元年の時点ではこの跋文は成立していなかったと見なければならぬ。由比演徴が明和元年に『儀式徴大意』を写したのは確かであろうが、狩野文庫蔵本は明和三年以降に改めて写し取られた写本ということになる。書写奥書の内容が動かなければ、笠翁のいう「三十四年前」の方に間違いがある。笠翁の老齢と流浪の人生を思うと、彼の計算違いと取るのが妥当かと思われるが、この点に関しては後考を俟ちたい。

信遍と笠翁との交渉は、翌年の「飛鳥山碑文」撰文においても見出すことが出来る。これについては元文二年の条で改めて述べたい。

○ 七月、『題苑』刊行。

『題苑』は、五言絶句以下詩形ごとに詩題を集めた、小本一冊の携帯版詩学書である。実見したのは、白杵市立白杵図書館蔵稲葉家旧蔵本と架蔵本の二本のみ。他に国文学研究資料館の日本古典資料調査データベースに新潟大学附属図書館蔵本の調査カードが登録さ

れ、中野三敏氏『蔵書目その八 詩学書(『文献探究』八号、一九八一年六月)にも登載される。『国書総目録』には神宮文庫・陽明文庫・静嘉堂文庫等の所蔵が記載されるが、未見である。詩学書は広汎に流布する性格の書物であるが、図書館・文庫の所蔵は少ない。管見に入った伝本の書誌事項を比較すると、次の異同が確認された。すなわち表見返しの記事の有無と、それに連動する裏見返しの記事である。

まず、表見返しに記載がなく、単粋のなかに「元文元年孟秋本出／江都／書林／萬屋清兵衛／浅蔵屋久兵衛／辻村宇兵衛／寿／粹」(／は改行を意味する)との刊記を有するもの。架蔵本、新潟大学蔵本が該当する。中野氏蔵本も、「蔵書目その八」に「江戸萬屋・浅蔵屋・辻村三肆合板」とあるので同じであろう。『割印帳』享保二十一年八月の条(行事小川彦九郎)に、

元文元辰ノ八月

題苑 小本 壹冊 錦江先生作 板元

浅倉久兵衛

辻村五兵衛

とある(引用は『江戸本屋出版記録』上巻へゆまに書房、一九八〇

年)の影印に拠った)のと、おおむね一致する。相違点は、辻村が『割印帳』のいう「五兵衛」ではなく「宇兵衛」であること、『割印帳』の書名の右肩に「七月(孟秋)」ではなく「八月」と記されていることの二点。辻村宇兵衛は井上隆明氏『改訂増補 近世書林板

元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）にも記載がなく、五兵衛の分店かと推測される。出版の申請は五兵衛自ら行い、実務を分店に肩代わりさせたというところだろうか。時期については、小川彦九郎が割印を捺した段階ではまだ出版には至っていないのは確かなので、市場に一回ったのは八月以降と見なければならぬ。なお、版元のうちの一軒浅蔵屋久兵衛は、本書に序を与えた入江南溟と関係の深い書肆で、享保十三年に南溟編『北山遺稿』を刊行しており、安永四年には『南溟詩集』四冊を出版することになる（「年譜稿（五）」『日本文学研究』三二号、一九九六年一月七七頁）。出版交渉には南溟の力添えがあったと見てよからう。『割印帳』の記事および南溟との関係から見て、当初の出版が萬屋・浅蔵屋・辻村三肆で行われたのは間違いない。

次に、表見返しに「錦江先生撰定／千里／必究／新／刻／題苑完／江都書林千鍾房梓行」とあり、刊記は同版の単梓内の「元文元年孟秋本出／江都／書林／」までを残し、以下を削って「日本橋通一町目／須原屋茂兵衛」と入木してあるもの。白杵図書館蔵本が該当する。

両系統いずれも初印ではなく、刷りの状態にはほとんど差がない。三肆相版として発売されて、後に版權が須原屋茂兵衛に売却されたと考えるのが一番自然であろう。須原屋が改めて刷り出すに当って新たに表見返しを加えた。須原屋にはこれこそが初版であるとの体裁を整える必要があったのであろう。版權移動の理由など、もとよ

り不明というほかはない。三肆相版の三本はいずれも原題簽を欠くが、須原屋版の白杵図書館蔵本は亜麻色表紙に子持ち杵の原題簽「題苑完」を有する。初版初刷に近い伝本が管見に入らないので書誌の詳細は今後の調査に期し、全体の構成を概観するに留める。

「題苑序」四丁半。末尾に「享保丙辰之春／南溟江忠固誌」とあり。半丁白紙。「抄出書目」二丁。書目列挙の前に「題苑／錦江先生撰定／男鳴梅卿和鼎／門人沢伸堅子弥／全／校」とあり。「題苑緒言」二丁。末尾に「芙蓉道人鳴鳳卿識」とあり。本文冒頭に「抄出書目」前と同文の記事あり。以下、五言絶句、七言絶句、五言律詩、七言律詩、五言排律、七言古詩、五言古詩、古楽府、舞曲等に分類する。一二六丁。「跋」一丁。末尾に「金陵贄規段」とあり。以上、見返しを除いて全一二六丁。

嫡男和鼎とともに校訂に従事した沢伸堅子弥、跋を撰した金陵贄規段、いずれも素性を明らかにしない。ただし、後者の「金陵」を号、「贄」を姓、「規段」を名と見ることができれば、吉宗に従って紀州徳川家から幕臣へと移った贄一族の誰かに比定する事が可能かもしれない。この「規段」は、次項で述べる『農家貫行』にも「規段」の名で跋を寄せており、信遍を「錦江先生」と呼んでいる。信遍に指導を仰いだ門人の一人なのであろう。『寛政重修諸家譜』巻一四七二（新訂版二二巻一四二〜一四四頁）を検索すると、享保三年に小姓となり、同一三年には務めを辞した弥一郎正周、家重の近習番から西丸の御小納戸に進んだ善之丞正長、その子正朝あたりが

候補に上る。「規」は「正」に通じ、「遐」には「長い」の意味があるから、「正長」の変名かとも推測したが、これ以上の憶測は慎むべきか。

南溟は序で「子陽、身は劇職に在り、心を斯文に潜む。乃ち退食の余暇、小子を教へて倦まず。之をして題引を集めしむ。」(原漢文)といひ、信遍も「題苑緒言」の中で「此編、原と童覽に便ならしむ。」(原漢文)と述べる。信遍の私的な漢詩講読の副産物といつてよく、啓蒙的な実用書の域を出るものではない。ただし、「題苑緒言」は信遍の詩文観の提示としては意味があり、断片としてしか伝わらない彼の詩文を総括するための別稿執筆の際に、改めて取り上げることにする。

○ 冬頃、蓑笠之助正高著『農家貫行』成立。叙を寄せる。

『農家貫行』は半紙本二冊の刊本。内閣文庫蔵本(請求番号一八三一―一六八)は、「絵／入／農家貫行 上(下)」の原題簽、巻末の刊記「蓑笠之助源豊昌蔵板」を有する。刊記の前の「跋」に「元文改元之冬／金陵 費規遐子夕誌」とあるので、この頃の成立とした。刊記にある「豊昌」は著者蓑笠之助正高から数えて四代目の子孫(実際は孫)に当り、刊行は豊昌の代に蓑家の出資で行われた。もともと『割印帳』宝暦八年一二月条(行事吉文字屋次郎兵衛)では、「板元売出し吉文字屋次郎兵衛」として宝暦九年の予定に組み

入れられているので、吉文字屋に版權を売却したのかもしれない。伝存する諸本を調査し尽くしたわけではないので、詳細な検討は今後の課題とし、おおよその成立時期を見定めるに留める。「日本經濟叢書」や「日本經濟大典」に収録され、農民を対象とした教訓書として流布した。信遍の撰文になる「農家貫行叙」は巻頭を飾る。先にも述べた通り、跋の撰者は「題苑」と同一人物である。正高とも親しいらしく、後述する正高の経歴を考慮すると、幕府関係者と見るのが適当であろう。

正高は吉宗によつて見出された。「有徳院殿御実紀附録」巻九に、蓑笠之助正高といへるは、その先祖蓑笠之助正尚とて、台徳院殿の御生母宝台院殿の父なりしかば、筋ことに召つかはれしに、中葉罪を犯して士籍をけづらる。よりにて正高にいたるまで、世々猿楽となりてありしに、稼穡の事をこのみ、水理をもよく弁へたるの聞えありければ、これをもあげ用ひられしに、勸農の事かしこく沙汰せしかば、つるに代官にのぼせられて年をかさねたり。

と記すように、猿楽師から代官にまで昇つた異色の人材といえる。『寛政重修諸家譜』巻一二二(新訂版一八巻三七九頁)には、

正高 庄次郎 笠之助 致仕号相山 猿楽の列たり。享保十四年八月大岡越前守忠相が支配となり、其後御料の地三万三千五百石余を預けられ、支配勘定格となり、元文四年二月八日班を進められて御代官に転ず。(以下略)

とあつて、元文元年時点では支配勘定格を勤めていた。妻は田中休愚の娘だったから、信遍との縁はここからも生じている（信遍と休愚の関わりについては、「年譜稿（三）」（『江戸時代文学誌』八号）「年譜稿（四）」（『日本文学研究』三〇号）参照）。延享三年、正高は信遍の著『農譚拾穂』に跋を寄せ、寛延二年、信遍は正高の著『続農家實行』（刊行されず、写本で伝わる）に和文の序（「蓑氏がつくれる書に記す」として東京大学史料編纂所蔵『芙蓉楼全集』巻七にも収録される）を執筆するなど、農政家としての二人の交友はさらに続いてゆく。それぞれ当該年において検討を加えるので、今はこれ以上触れない。

信遍の「農家實行叙」を以下に掲げる。通行の字体に改めた以外は、句点の位置も含め、原本通りとした。

農家實行叙

相中令蓑君。著農家實行。勸用俚語。以便民。實行也者何。凡諸漢人之言也。蓋其布衣友。馬老之所需云。馬老為人慷慨。勸人為善。書成亦焉。則曰善哉蓑君之言農事也。仁民之心。能察淵魚。師古不師古。沿今不沿今。本孝悌。勤力田。語邇而旨遐矣。其周室誦法之遺邪。果用此道。則於治民乎何有。吁四人之業。農為大矣。一夫不耕則飢至。一婦不蚕則寒至。不耕不蚕。天下傲焉。則天下之寒飢至焉。是故治国之本。在勸農也。稼穡民之天職也耳。以奉臬官。以養君子。以事父母。以育子弟。迺

以暇日。聞孝悌敦厚之教。則放僻邪侈之俗以變。易直子諒之心以生。孝恤睦婣。興於下也。争訟之路塞矣。而後民業其生。重犯法家足人給。能得全首領。共天職。則農家之事畢矣。蓑君好學乎。其焉凡焉。方今聖上。銳志理術。以百姓為心。民望如草。皇沢如春。当今之時。揭之木鐸我邑。猶水之就下也。莫之能禦也。迺懷而去。遂因蓑君問叙鳳卿。々々不閑農事。然是老之言。遂誌其語。是為叙。馬老名史明。武之川崎邑亭長。

芙蓉道人鳴鳳卿子陽甫

『農家實行』本文の巻頭に「或人のしるしをける教の文を写して予が親屬子孫に示す条々凡十二章」の見出しが掲げられ、「或人といふは或村方の名ぬしなるが、此大書せし所の十二ヶ条の法度を壁に糊し、ヶ条のごとく平生守り勤たるに、村方おさまり安平也。是民間一生の間操守べき肝要のをしへなれば、則書写して一書となし、親類子孫えんじや等に説示となり。（以下略）」と正高の解説が続く。本書はあくまでも「或村方の名ぬし」の教訓を正高が紹介し解説を加えるという体裁をとる。信遍の叙も、最後に名主の素性を明かし、て信憑性を保証するまで、「馬老」の思想に即して叙述を進める。武蔵川崎といえ田中休愚の本拠であり、休愚の徳が啓蒙の成果を確かなものとしていたということであろう。それはまた、吉宗の將軍就任以降、江戸の地で啓蒙教訓の書を出版する風潮が高まり、定着を見せつつあることの現われでもある。信遍の叙は、農村の支配

層にある程度広汎な読者を想定したものが、詩文集などに寄せるものとは違って晦渋の度を弱めている。

元文二年 丁巳 一七三七 四十九歳

○ 正月、「はるの始の雪をことぶき申せしことば」(『芙蓉楼全集』卷二)を記す。

まず、全文を掲げる。適宜、句読点・濁点を補う。

はるの始の雪をことぶき申せしことば

雪を豊年の瑞といへることは、ふりぬる世々のためしにもひかれて侍るらし。まいて堯曆の階莫七えふを生ずるときにあたりて、八しまのなみ治り、四方のあらし音も聞えず、盈尺のひかり玉の塵を穆し、騰丈の笑みぎりの山つくるさま、これぞ我君聖徳天にかなはせ給へるしるしなるべし。としのはじめの七日を人の日とさだめて、あくる八日をたなつものゝ日とするよし、もろこしの鳥の跡にとめをくとなむ。さればくれ竹のひとよあくるよりはじめて、あづさ弓八のけふにあたれるまでに、一とせのあらましごとをうらなふに、おほやうたがふことなしといふにや。ことしぐはんにちよりこの日におよびて、和風えだをならさず、甘雨つちくれをうごかすことなし。いそのかみふる

とし、年号改元ありて、おほいなるふみと定めをかれぬるにぞ。しかあればからのやまとのふみのみちいとゞしくさかへて、よつゝのゑびす、百の民草も、なべてこのみよの御恵ぐみになびき、いつくしみにうるほへるしるしあらはれ、めでたや、まつのはるのうたちまたにみち、まさごもいはほの領の声さごとことに聞ゆめり。いづれに花とりにそへ、月雪につけ、松と竹のことぶきにみせても、みよのめぐみつきせぬひかりをまし、五風十雨のかしこぎためしも、四海万民戸ざしわするゝおほん政事も、いやさかへにさかへて、この御ときをあふぎかしづき奉ること、しもがしもにもねぎあへる心のあまりに、春の雪といふことをみそもじあまり一もじのかみごとにをきて、ひとりごち侍るとなむ。

はなゝれやまだき梢のはるの色を日かげにみする雪のほひはるりをもてみがくとや見む春のゆき玉しく庭につもるひかりをのどかなるはるのひかりをそえてよのひとの心もゆきと解らしゆたかなるみよのためしは新なるはるふる雪にかねてしるしもきみがよのふかき恵はあらはれて千さとのはるに雪ぞふりしく「いそのかみふる」とし、年号改元ありて、おほいなるふみと定めをかれぬるにぞ」との一節から、元文二年正月の作と認定した。吉宗の治世と文芸の興隆が一体化した信遍の意識の中では、泰平の御世を支える「おほん政事」への賛辞と、「からのやまとのふみのみ

ちいとゞしくさかへ」る文林に身を置く喜びの言葉が直結する。その象徴が雪となつた。正月の寿ぎの記文として吉宗に献じられたのではないかと推測する。

○ 五月、『統泉山景境詩歌集』刊行。「泉山秋月」の題で和歌一首入集。

『統泉山景境詩歌集』は半紙本一冊。武蔵国埼玉郡河原の照岩寺住職竺巖輯。周察・周円校訂。坂光淳の「統泉山景境詩歌集序」、国枝貞親の「統景境集跋」を有する。刊記には「元文二年丁巳五月吉祥日／平安書林／堀川錦上ル町／西村市郎右衛門／東都書林／本町三丁目／西村源六」とある。

本書成立の経緯は坂光淳の序文に尽くされるので、便宜上引用する。

統泉山景境詩歌集序

筆の林きるに尽る事なく、硯の海波にはてしあらずして、難波津の流にそひ、浅香山のかけによりて限る事なきは、ことの葉の道なり。いにし比、武蔵国埼玉郡河原の里照岩禅寺竺岩老和尚に謁し侍りし時、予にかたられしは、河原の郷にして、八ツの景十余り二ツの境の名を題して、あまねく貴とき賤しきをわかず、此国のことの葉を集め、又は唐の歌によれる人々の詠吟

を乞求め、景境詩歌集と名づけて梓にちりばめ、世に広めしに、又ことし或やんごとなき方のすゝめにしたがひ、かさねて所々につたへ、高き低をわかず求得たるにまかせて、いにし書の跡を追ひ加んの心をもて一の巻となしてひろめんとす。されど大和もからも其善悪をわきて撰べるにあらず。便にしたがひ縁に任せて落来れるまゝに記しぬ。此事のよしを此書の初にしてよと侍りしを、度々かへさい申侍るに、しゐるものすべきよし、さのみはいやなきに似たれば、其需にしたがひぬ。

寔此景有とも老師の志にあらずは、いかで世に知んや。この書世にひろまるのみにあらず、泉山の絶ぬ迹を伝へ、利根川の流ての代に残らん事をよろこぶ。僕何の幸ぞや。此書の時にあひてかたくなしきことの葉を記しぬるを、かつはよろこび、かつは恥思へどいかゞはせんと、短き筆をうごかし、そのとめをふさぐ事にはなれり。

坂将曹光淳序之

近世前期から中期にかけて著しく流行した八景詩歌が江戸周辺の一寺院にも波及して、二度に渉る詩歌集出版を実現させた。光淳序にいう「或やんごとなき方」とははっきりしないが、詩人の名寄せの劈頭に居並ぶ松平讃岐守頼恭、奥平大膳太夫昌成、松平越中守定賢、同じく歌人の松平陸奥守吉村、松平貞五郎頼濟、酒井一学忠用、一柳兵部少輔頼邦、市橋壹岐守直方などの大名や世子のいずれ

かを指すのであろう。光淳自ら「大和もからも其善悪をわきて撰べるにあらず。便にしたがひ縁に任せて落来れるまゝに記しぬ」と告白するように、作品は決して厳選されているとはいいがたい。作者の素性を知る手がかりが全くないに等しい名前が名寄せの大半を占め、光淳や大名達ともほとんど没交渉なので、歌人の一人に「信遍 成島道築」として掲げられる信遍の名前は、何とも場違いに映る。冷泉派を主体とする幕臣文壇の中枢に位置する信遍だが、本書ではあくまでも脇役に過ぎなかった。信遍の作は、

空に先ひかりをみせていづみ山いづるも清き秋のよの月
の一首。参考までに、八景と十二境を列挙しておく。漢詩と和歌で題に異なる場合は、和歌の題を括弧に入れて示した。

八景

日光晴嵐（黒髪山晴嵐）、築波夕照（筑波根夕照）、赤城暮雪、
泉山秋月、熊谷晚鐘、利根帰帆（利根川帰帆）、成田落雁、長
井夜雨

十二境

山堂秋夕、野曲耕夫、岸頭甘菊、隣里曉鷄、寒夜叫猿、芦洲鳴
鶴、溪間桃花、亀岡古松、蓮池遊魚、柳岸夜泊、虎溪紅葉、竜
淵瀑布

広大な関東平野を髣髴とさせる八景の気宇壮大ぶりには、関東の

地において新しい八景を確立させようとする竺巖の志と、それに応える詩人・歌人の浮き立つような気持ちが感じられて面白い。『諏訪浄光寺八景詩歌』の影響を受け、『飛鳥山十二景詩歌』へとつながる詩歌集の系譜に確かに位置づけられる催しであった。

なお、『諏訪浄光寺八景詩歌』と『飛鳥山十二景詩歌』は松野陽一氏校注で『新日本古典文学大系 近世歌文集 上』（岩波書店、一九九六年）に収められる。また、石野政雄氏「近世堂上派随想」（三古会編『近世の学芸―史伝と考証―』（八木書店、一九七六年三月）所収）が史的展開を適確に説明する。

（元文二年の項、未完）

A Chronological Record of Narushima Nobuyuki's Career (8)

Keiichi KUBOTA

I have written Narushima Nobuyuki's career from 1689 to 1736 in series. This Paper contains his achievement in 1736, the remainder of the chronological record (7), and in 1737, which is still incomplete.

He showed his many-sided scholarship in this period. He published *Daien*, a list of themes of Chinese poetry, as a guide book. And he encouraged Mino Masataka, an agricultural leader, by writing a preface of his book: *Nohka Kankoh*. As a scholar of Japanese classics, he was consulted by Hayashi Ryuoh about his book : *Gishikicho*.